

地域力を高める  
—地域連携の視点—

大西 雅子

**To improve the bond of community  
— Regarding the corporation of community —**

Masako Ohnishi

姫路大学教育学部紀要

第11号

平成30年12月31日発行



## 地域力を高める

### —地域連携の視点—

大西 雅子

#### 要旨

地域を基盤とする包括的支援の強化を考える上において、地域の困りごとに対しどのように解決システムを活用するのか、きっかけを助力するののかという重要性について考えていくことは必須である。現在、厚生労働省のいう『我が事』・『丸ごと』の地域づくりを育んでいこうという取り組みが盛んに行われつつある。本研究では、こうした「地域共生社会」の実現に向けて行った取り組みから地域力を高めるために必要な地域連携の視点として研究課題明らかにする。

キーワード：地域力、地域連携、きっかけ、エンパワメント

#### 1. はじめに

筆者はパワーレスな状況にある方たちを対象に何らかの助力ができないものだろうかと常々考えて活動を行っている。物事を見る視点として、個別的、全般的な視点があるが、エンパワメントの視点<sup>1)</sup>も同様である。

個別的というのは、集団を構成している各個人であり、全般的というのは各個人が構成する全体像のことであり、個別的アプローチ及び、全般的アプローチが問題解決には必須である。

Wallerstein N, Bernstein E<sup>2)</sup> はエンパワメントについて、「コミュニティやより広い社会において、自分達の生活をコントロールしていくために、人々や組織やコミュニティの参加を促進していくソーシャル・アクションの過程」としているが、個別的支援、全般的支援の双方が相まってよりよい社会の形成につながっていく。

自分で生活や容共が改善する力が弱いパワーレスな状況に置かれた人の場合、どのような「きっかけ」が有効なのであろうか。きっかけをエンパワメントすることに関しては、著書にも記したが<sup>2)</sup>、本稿では、部屋の片付けに対して個別的にアプローチを行った事例と全般的に行った事例を挙げながら、有用なエンパワメントについて考察を行っていくこととする。

#### 2. 「きっかけ」が自信につながる

〔個別的なアプローチ事例〕

##### ○事例1

性別：女子

年齢：9歳

所属：小学校3年生

主訴：登校難渋、不登校状態

家族：母、兄（中3）、本人

父親のパチンコによる借金が膨らみ、蒸発してしたため、母がうつ症状となり、働くことが難しくなっている。また、家の中の整理整頓、掃除ができない状態が続いていた。母親からの相談内容として、部屋を片付けて欲しいという要望があった。そこで、部屋の片付けに学生ボランティアと共にいくこととした。3間あるうち、すべての部屋に共通していえることは、床が見えず荷物が置いてあ

ること、吊るしてあるものが多く、部屋が奥まで見えないこと。また、長年置いてある書類、動かさない衣服に誇りが蓄積していること、水回りが汚れていること、玄関など、カビがめだつことなどが目立っていた。家族から、「片付けてもいい」という同意を得て、おおよそ50個分のゴミ出しを行った。終了時には、床は見えるようになり、空間も広がり、何よりも荷物の置き場となっていた子どもたちの学習机が使えるようになっていた。

開始当初は、片付けを嫌がっていた子どもたちであったが、エプロンをしめて、やる気を出し、意欲的に頑張ってくれた。

その後、お母さんからの話によると、家で過ごす方にも変化が表れ、積極的に取り組めるようになり、登校に至るまでとなったという。また、一緒に、兄の机回りなども片付けたのだが、登校難渋気味だった兄も順調に登校できるようになったということであった。

##### ○事例2

性別：女子

年齢：15歳

所属：中学校3年生

主訴：登校難渋、不登校状態

家族：母、本人弟（小6）、

本人が小学校4年生の時に、父親が突然家を出て行ったということがとがあり、それ以来、家族船体が不安定な状況になってしまったという。それ以来不安定な精神状態であったという。

中学2年生2学期、始業式から帰ってきてから寝込んでしまい1か月間家を出られなかった。そこから民間フリースクールに通い、メンタルヘルスケアを受けていた。その後、中3の後半から少しづつ登校できるようになっていたという。

父親から、「お前たち（子どもたち）を捨てる！」と言われたこともトラウマとなっており、家族が急に不安定な状況となっているということがその家庭にとっては大きな不安定要素であった。

高校受験を前にして一斉に部屋の片付けにあたり、その都度部屋をきれいにすることを心がけている中で、高校受験も終え、元気に生活できるようになっていた。

〔全般的なアプローチ事例〕

○事例 3

性別：女性  
 年齢：64歳  
 所属：なし  
 状態：精神疾患を有している。  
 家族の遺品を整理したい  
 家族：本人

家族の遺品が家の中の 1 / 3 を占めており、自分で片付けられない。生活保護をもらいながら、精神疾患を患っているため、入院と自宅を行き来している。最近、姉が亡くなり、自宅に置いてある姉の持ち物が多すぎて生活空間を圧迫している。荷物を処分したいが、タンスなど大きなものもあり、自力での処分は処理出来ない。また、業者に依頼する金銭的な余裕もない。

このケースでは、介護保険サービスを利用されていることから、地域包括支援センターの方、ケアマネージャー、民生委員・児童委員との連携を図りながら、学生ボランティアも参加し、荷物でいっぱいであった一間をきれいに片付けることが出来た。開始直後は、お風呂、トイレも使えないぐらいの状態であったが、それらもきれいになり、使用可能となった。

このように空間が出来たことで、布団を購入しても良いという許可がケアマネージャーから出ることになり、初めて布団を購入して就寝できそうな目途が立ったという。幼少期より、布団で寝たことがなかったとのこと。

片付けについて、当初は消極的であったが、段々と作業が進んでくるに応じて、積極性が出て、自ら率先して片付けに参加するようになった。その後、本人から「ご近所で、こうした悩みがある方がおられたら、お手伝いに行きたい」と話されるまでに至った。

○事例 4

性別：女性  
 年齢：65歳  
 所属：なし  
 状態：臓器疾患を有しているため、なかかな家の片付けができない。ペットを飼っているが、世話を十分に出来ない。介護支援サービスを受けている。  
 家族：本人、夫

ヘルパーが月に 2 回、1 回45分間の頻度で家の片付け作業を行っているが、ペットの汚物が処理されずに室内にあるために、衛生面での問題が生じていた。家の方はそのことについては気に留めていないが、このお宅の作業が大変過ぎることでヘルパーが訪問を継続していくことに困難が生じて、ヘルパー事体をやめてしまうという事態となっている。ある訪問回では、延べ人数 7 人で作業を行い、冷蔵庫の中に傷んだものが入っていたのをすべて処分し整理整頓を行った。また、お台所周り、また順次玄関先のゴミの片付けと清掃などを複数回にわたって行った。学生ボランティアも参加しての清掃作業となり、回数を重ねるごとに、家の方のモチベーションも上がり、従来お料理好きであったという奥様も少しお料理を作ったりする気持ちになれるところまで改善した。

こちらのお宅の課題として、飼い主がきちんと p ペットの管理が出来ないといことがある。家の衛生が保たれていないという課題があった。この件に関しては、家の方は問題視しておらず、そうした問題を解決するには、家の中に入るヘルパーといった支援する方たちにペットを飼う際に関心を持ってもらうことについて知識を得ていただく必要があると考えられた。

3. 支援の体制

いずれのケースにおいても困っている状況に対して、解決できるようなきっかけを作っていくことが善処につながっている。

また、だれがどういう立場でかかわるかが重要である。

図 1-1-3、図 2 に示したように、支援体制、かかわる体制において、いかに情報共有を行い連携を行っていくかが鍵となる。もちろん関わる方たちは、その都度違ってくる。

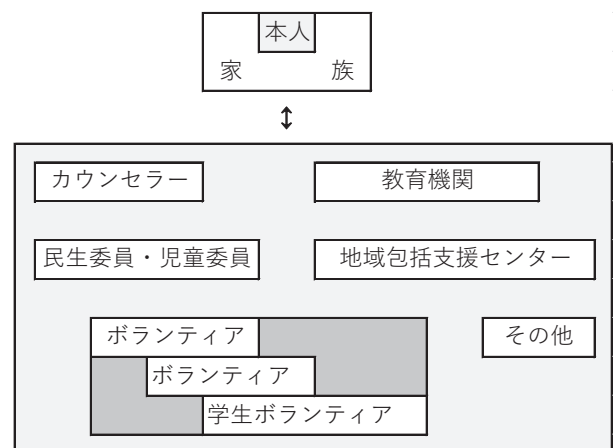


図 1-1：支援体制（教育機関）

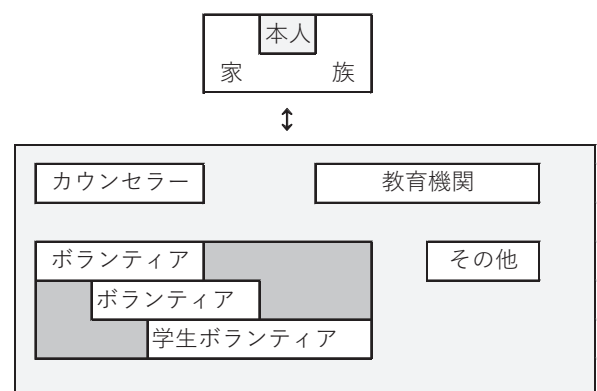


図 1-2：支援体制（教育機関）

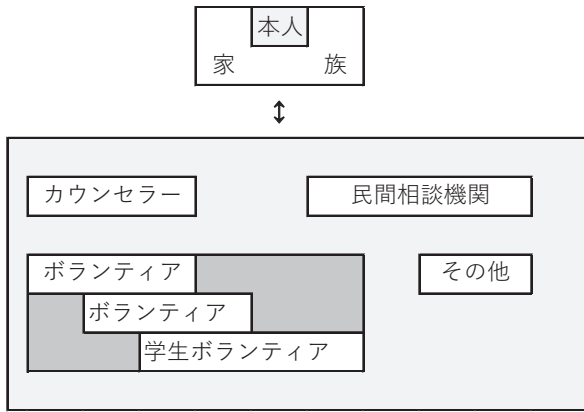


図 1-3 : 支援体制 (教育機関)

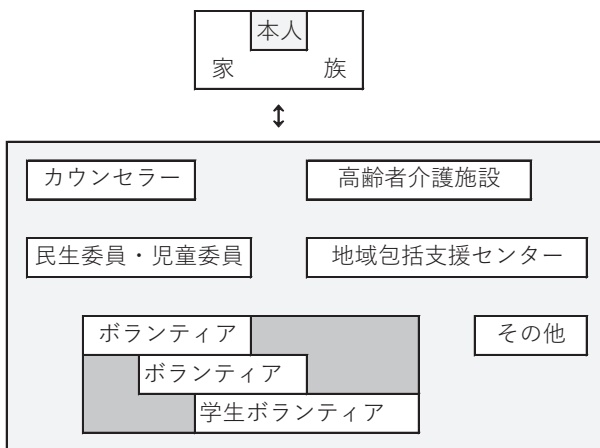


図 2 : 支援体制 (支援機関)

ボランティアのかかり方として、地域の方もおられるであろうし、学生という場合もある。ボランティアがこうした仕組みの中で活動しようとする時、どのような立場で、どのように関わるのかということについての事前の打ち合わせが欠かせない。

#### 4. 活動の中から見えてきたこと

事例 4 のお宅に伺った際に、「必要な知識を得ることの大切さ」という課題があがった。ペットを衛生的に飼うということに関する知識である。そこで、姫路市動物管理センターの方においでいただき講習会を行なった。この講習は、姫路市において実施されている「市政出前講座」という仕組みを活用した。

参加者は、支援活動に関わっている地域包括支援センターの方、民生委員・児童委員、高齢者介護施設職員の方、地域一般市民の方々であった。

講座内容は、「動物について」、「動物の適正飼育」、「動物由来感染症」、「動物の福祉」、「ペットと災害」であった。震災時にペットがどう避難するかについては関心の多い方がおられた。

講座を聞いていただいた感想としては、勉強になったという声が多数であった。

どことどう連携していくかという課題の中に、関係機関の調整を

行うことは基本だが、情報共有とともに こうした必要な知識や体験を共有していくということが大切であることが明確になった。

また、往々にして言えることであるが、こうした家の片付けをする場合、とりかかる前には、「もう結構です」、第三者にはかかわってほしくないとして、本人が不機嫌になる場合が多い。けれども、実際に片付けてみると、良かった！ありがとう！と笑顔がこぼれるのである。

関わる第三者がいかに信頼されて、良好な信頼関係を築くことが出来るかが大きいといえる。

#### 5. 地域力におけるボランティアの今後の課題

##### ①ボランティアに関心があるかどうか

2014年に実施した「ボランティアに関心があるかどうかの意識調査」<sup>3)</sup>によれば、高校生約半数が「ない、どちらでもない」と回答、大学生4割が「ない、どちらでもない」と回答し、一般成人も同様である。と回答している(図3)(図4)(図5)。

また、ボランティア活動をしたことがある人は、ボランティアに関心があり、ボランティアをしたことがない人の中に興味関心がない、もしくはどちらでもないという傾向がある。

地域連携においてボランティアというマンパワーは欠かせないが、そもそもボランティアに関心がある方が半数前後にとどまっている現状を考えると、ボランティアに関心のある方を増やす必要がある。その為には、ボランティアに携わる方がどのような体制でかわることが出来るかという仕組みを整える必要がある。

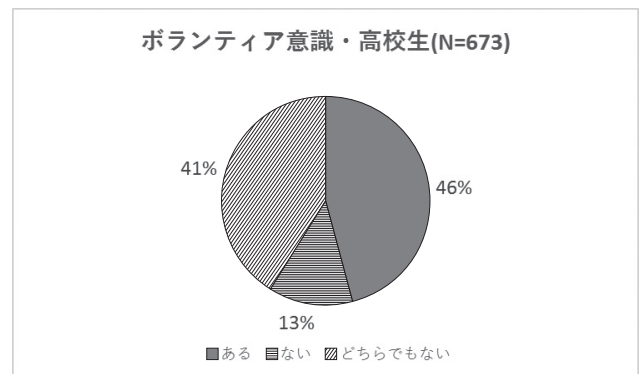


図 3 : ボランティア意識・高校生 (N=677)

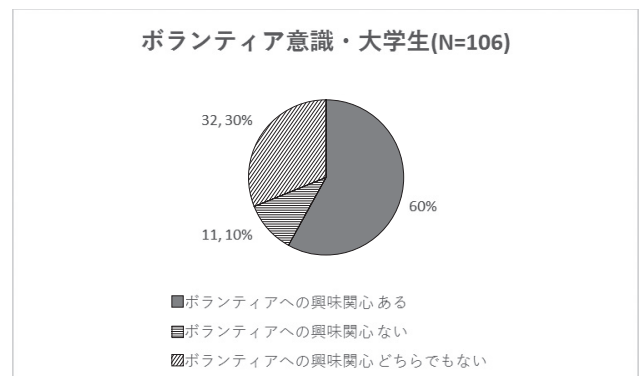


図 4 : ボランティア意識・大学生 (N=106)

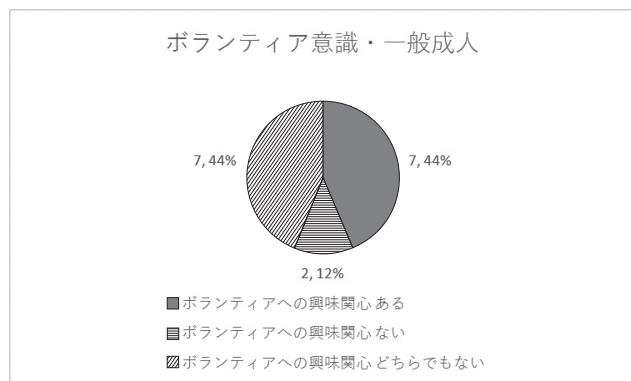


図5：ボランティア意識・一般成人 (N=16)

### ②マンパワーとしてのボランティア

連携する各機関がどのようにボランティアを認識するかという課題がある。

今回の試みのように、学生が活動する場合、また地域の方々が活動する場合にはどのようにするのか。ボランティアの方の安全をどう保障するのかなどの課題を整えるのはどこなのかなど、円滑な活動のために整えることがある。

また、必要な知識の共有のための勉強会などを開催して、知識のブラッシュアップの機会を設けることも有用である。

### ③困りごとや関わる必要性をどう把握するのか

関わる必要性がある、つまりニーズがあるのかどうかを知るには、そうした情報を集める必要がある。常々、連携体制の中での情報交換、情報共有を行っていくことで、関わるきっかけにつながっていく。

### ④情報共有及び知識共有

各関連機関の情報共有はもとより、お互いに必要に応じて専門的な知能を得る機会を設けることが大変有用であるとわかった。

### ⑤支援体制の継続について

ボランティアは有志で行うわけだが、ボランティア活動の体制基盤をどう整えていくのかという課題がある。

学生ボランティアについては、大学や学校機関との連携になると考えられるが、地域の方のボランティア活動を支える母体が必要となる。社会福祉協議会や、地域包括支援センターなどとの話し合いの中で、これらの課題を整えていく必要がある。

保険の問題、経費をどうするのかなど具体的な課題解決策が必要である。

### ⑥きっかけが自信につながる

何かをやり遂げたという成功体験の積み重ねが自信につながる。ポジティブな記憶が生きる力となる。パワーレスな状態にある方々に如何にきっかけをエンパワメントしていけるか。この課題は常に考えていく課題といえる。

## 6. まとめ

地域力とは、地域にお住まいの方々が地域の抱えるニーズ（必要性）に応じて協力して解決していこうとする力のことをいうが、地域を活性化してより良くしていこうという気持ちになっているからこそ、困りごとなどの解決をしていこうというモチベーションが生まれる。

様々な連携の試みから、今後も地域力を高めていく活動に継続的に取り組んでいく。

## 註

- 1) 総合都市研究第81号2003  
「エンパワメントに関する理論と論点」  
巴山玉蓮, 星旦一二  
P.6
- 2) Wallerstein N, Be rnstein E ( 1988) :E mpowerment educ a tion:Freire side as adapted ω health educat 仰 L Health Educ Q, 15 , pp .379 · 394
- 3) 平成26年度姫路市政策研究助成事業 課題テーマ4「参画と協働を推進する施策の提案」採択研究テーマ「地域力を育てる子ども・保護者支援への取り組み」報告書  
平成27年2月  
近大姫路大学教育学部 大西雅子研究室  
大西雅子他

## 参考文献

- 同志社政策科学研究10巻2号 (2017-10-19)  
『地域公共人材育成の現状と今後の展望』  
藤井 誠一郎
- 同志社政策科学研究10巻2号 (2008-12-20)  
『私立大学の収益事業の制度を利用した地域貢献の可能性』  
藤井 誠一郎
- 同志社政策科学研究9巻1号 (2007-8-3)  
『大学と地域との地学連携によるまちづくりの一考察』  
杉岡 秀紀

To improve the bond of community  
– Regarding the corporation of community –

Masako Ohnishi

Abstract

It is an urgent issue to consider the importance of how to make the most of the community care system to face the problems the local society has.

Meanwhile, the efforts of the community building have been progressing more and more recently based on the mottos advocated by the Ministry of Health, Labour and Welfare such as “Wagakoto” (literally “as if it were our own affair”) and “Marugoto (literally “entirely”) .

We examine the different important aspects to create “the inclusive community” through the activities we have done.

Key words: community care system, local society, empowerment

